

## ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K)

### 1 NeS-K の実践の経過

#### ネットデイの取り組み

ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K) は主に兵庫県のほぼ中心部に位置する氷上郡でネットデイの取り組みを進めています。

現在 (1999 年 7 月末) までに NeS-K は氷上郡の 3 校でネットデイを実施したほか、氷上郡教育委員会ネットデイも手伝いました。

- 1998年 3月28日 M小学校ネットデイ
- 1998年 9月 5日 氷上郡教育委員会ネットデイ
- 1998年10月 1日 ネットワークサポートセンターinかんさい結成
- 1999年 1月24日 T小学校ネットデイ
- 1999年 3月28日 S小学校ネットデイ

氷上郡では平成 9 年度から全小中学校 (32 校) を結んだ「氷上郡教育委員会ネットワーク」の整備が始まり、各小中学校ではパソコン教室内 LAN がインターネットに接続されています。

最初にネットデイを実施した M 小学校は、鉄筋 2 階建ての瀟洒な校舎です。1 学年 1 クラスの小さな小学校で、校長室には生徒全員の顔写真が貼られ、学校全体がなごやかな雰囲気になっています。

じつは M 小学校にはネットデイの前史がありました。

当時、M 小学校は遠隔共同学習プロジェクトに参加し、実験校としてノートパソコン 7 台の提供を受けていました。プロジェクトの開始に伴ってノートパソコンを活用するための設備一式が提供され、そのとき大学研究者、技術者、メーカーの数名のグループが M 小学校の情報教育担当の教員とともに、サーバの設置とパソコン室内 LAN の配線工事を自主的におこなったのです。

ちなみに、このグループは群馬県のインターネットつなぎ隊をもじって「インターネットつないじゃっ隊」と名乗りました。一度だけの自主的な活動でしたが、その中にはのちに NeS-K のコアメンバーとなる技術者 (M さん) も個人参加していました。

氷上郡での情報教育の取り組みが仲間うち話題にのぼるようになったのは、このことがきっかけです。仲間の 1 人であるフリーライターはその様子取材し、『ASAHI パソコン』(1998 年 2 月 15 日号) にレポート (「町を超え WAN で学校をつなげ / 地方にこそ必要と中国山地の 6 町が進める」) を書きました。

そして掲載号が発売されたあとの2月13日、M小学校で開かれた研究発表会(2章参照)を見学に行ったところ、LANケーブルがまるでヘビのように廊下の壁をはいまわり、そればかりが防火シャッターの下をくぐっている光景に出くわしたのです。

「これは、あかんで。ちゃんと天井裏を通さへんと、防火シャッターが閉まらへんやんか」と感想を漏らしたところ、上記のプロジェクトを進めていた大学研究者が「ネットデイという方法がある」と悪魔のようにささやいたのです。

「そうですね。一丁、やりましょうか？」

「できますよ」

研究発表会のかたわら打診してみると、M小学校で情報教育を担当するA先生は、「それはいい。お願いします」

と二つ返事です。氷上郡教育委員会の指導主事であるKさんは即答を避けましたが(第2章参照)、このとき誰かが反対の意思を明確にしていたら、おそらくM小学校ネットデイの企画はただの立ち話で終わっていたと思います。

こうして立ち話から始まった「ネットデイやろう!」という企画は、その日からまるで生き物のように成長を始め、43日後に実現することになりました。

M小学校では7台のノートパソコンを自由に使える環境にあったため、普通教室でもインターネットを利用したいという要望が募っていたわけです。もちろん、その背景にはM小学校の教員たちの積極的な取り組みの姿勢があったことはいまでもありません。

しかし、誰がどのようなしんどさを背負わなければならないかという見通しもなく、いまから考えると、無謀な試みでした。

## 最初のネットデイの準備

準備の道のりをまとめておきます。

2月13日(金)	研究発表会
2月25日(水)	ミーリングリスト開設
3月9日(月)	下見
3月16日(月)	やっとGOサイン(町、学校)
3月20日(金)	教育委員会、町、学校、ボランティアの四者会談
3月26日(木)	部材調達
3月28日(土)	ネットデイ当日

当時はまだNeS-Kという組織はありませんでした。でも、ネットデイについて次のように考えて計画を進めました。よくまあ、図々しく、こんなことを考えたものです。

M小学校はすでに職員室とパソコン教室がインターネットにつながっているのですが、ネットデイでは学校の希望する箇所へLAN配線を延長して情報コンセントを設置する。

ネットデイはボランティアの祭りではない。M小学校ネットデイの実施組織は氷上郡内で作ってもらい、ボランティアはそれを支援する形をとる。

氷上郡では新年度から小学校は LAN 接続、中学校はスタンドアロン機の接続が実現するが、各教室への情報コンセントの配線までは予算化できていない。だとしたら、将来は自前でも配線拡張ができるよう、ネットデイは「校内配線技術講習会」を兼ね、氷上郡の他校の先生方の参加も呼びかける。

しかし、ネットデイとは何かということについて、はっきりとしたビジョンを持っていたわけではありません。

インターネットの利用環境を広げたいと願っている先生がいる。しかし、行政による予算化を待っていては何年先になるかわからない。だったら、みんなの力でやってしまおうじゃないか。それはきっと楽しいことに違いない……そう思えたのです。

それと同時に、学校にボランティアが入ることについての基準ということも、難問でした。ボランティアというのは 1 人 1 人は「どこの馬の骨」かわからない存在です。善意だけで押しかけるわけにはいかないからです。

この点に関して参考になったのは、平成 9 年度「新 100 校プロジェクト」成果報告集の「地域展開に関する企画」の中の「全国教育ネットワーク調査」で紹介された群馬県前橋市のボランティア評価基準でした。前橋市はボランティア組織である「インターネットつなぎ隊」に教育長名で協力を要請して、教育ネットワーク整備を進めています。次のように書かれています。

また、このとき前橋市は正式に協力を依頼するにさいして、行政としてボランティア団体を評価するため 4 つの基準を内部で設けた。いずれも全国の先例となるものであり、参考となるだろう。

- ( a ) コンピュータ・ネットワーク等に関する専門的な技術及び活用に関する見識を有すること。
- ( b ) 地域のボランティア活動団体として、熱意と見識を有すること。
- ( c ) 現在の公教育及び教育行政について理解と見識を有すること。
- ( d ) 組織として倫理条項等を含む明確な会則が示されていること。

まだボランティア団体ではなく会則は定めていませんでしたが、少なくとも精神として技術水準、熱意、理解、会則というこの 4 基準を満たしておこうと考えたわけです。

ネットデイへの参加の呼びかけも開始しました。といっても、仲間たちの個人的なツテだけが頼りです。上記の趣旨を理解し、なおかつ参加が可能な人を募りました。技術水準を満たすためのスタッフ確保という意味で、教育ネットワークの現場にいる人の首にはとくに太い縄を巻きつけてまわりました。

### 3 つの反省点

最初のネットデイなので、失敗は絶対に許されないというプレッシャーをひしひしと感じていました。春休み(3月未までの年度内)に実施するという前提だったため、時間がなく、準備もけっして段取りよく進んだとはいえませんでした。

反省点が3つあります。

1つは費用負担です。部材の調達には業者にまかせることにし、下見に同行してもらって、見積もりを出してもらったところ、配線材料(ケーブル、プラグ、コネクタ、情報コンセントなど)の合計は3万5000円でした。ある市教委から紹介された業者でしたから、てっきり値引き価格だと信じ込み、配線工事に必要なハブ3台はメーカーから寄贈してもらう段取りが整ったため、教育委員会、学校、町には配線材料に雑費を加えて総額「5万円」という数字を伝え、その予算額を前提にネットデイ実施に向けた交渉が進んでいました。

ところが、実施直前の土壇場になって、業者が同じ配線材料の合計を約15万円に変更してきたのです。

まったく、うかつでした。行政がからんだ事業では、いったん承認された予算額を減らすことは簡単ですが、増やすことはほとんど不可能です。実施2日前になって、あわてて大阪・日本橋の電気店街をさがしまわるハメになったはそのためです。同じ配線材料が見積もり額の約1/3の値段で確保できましたが、情報コンセントは数がそろわず、その業者に依頼する以外、方法がありませんでした。

さらにうかつだったのは、このことが前例となって、のちのちまで残っていくことを予測さえしていなかったことです。町行政はネットデイはこれぐらいの費用でできるという受け取り方をし、「格安」ということに比重が置かれてしまう結果をもたらしたのです。

もう1つは、配線経路の確認です。M小学校の校舎はまだ新しく、なるべく美観をそこなわないよう、原則として既設配管を利用する方針を決めました。

ところが、下見のさいに配管の経路をすべて確認できなかったことが、当日の作業を難しくしました。しかも確認できなかった経路の中には、最も肝心のタテ系(1階と2階を結ぶフロア間配線)も含まれていたのです。

これはひとえにネットデイの経験がなかったことが原因でした。

そしてもう1つ、ボランティア側に十分理解できていなかった事情も明らかになりました。それは氷上郡教育委員会が6町による共同設置の教育委員会である、ということの不自由さです。

氷上郡では、通常教育委員会と違って、学校の設置者は教育委員会ではなく、各町なのです。氷上郡教育委員会がネットデイの実施を了承しても何の実効もありません。というか、教育委員会はネットデイの許可を出す立場にないのです。

だから、ネットデイに賛同した氷上郡教育委員会の指導主事のKさんは、次に各町に対するコーディネートという普段にない役割を担わなくてはなりません。また学校管理職に対するコーディネートもKさんの役割となりました。

そういう不自由な事情と、年度末という多忙な時期ですから、ネットデイのGOサイン

が出るまでには二転三転せざるをえませんでした。

NeS-K のメンバーは学校関係者、教育委員会関係者が多数を占めています。教育行政の内情を肌で知っていることは大きなメリットですが、逆に教育行政の仕組みはどこも同じという前提で見えてしまいます。人間と同じように、顔はひとつひとつ違うのです。

### ネットデイの波紋

さて、八百万の神々に成功を祈りながら当日を迎えました。

ボランティア側だけでなく M 小学校からの呼びかけに答えて、約 50 人が集まりました。中国自動車道の宝塚インター付近の大渋滞に巻き込まれ、京阪神からの参加メンバーの遅刻が続出したことで、手順に狂いが出ましたが、普通教室 6 教室、障害児学級、校長室など 9 教室への配線をおこないました。

午前中はケーブル成端講習と作業下見を並行させ、午後からは全員がどれかの作業班に加わって配線作業という時間割です。

作業に加わりながら、「手づくり」という言葉を思い出していました。ある日、気づいたときに校内ネットワークが整備されているのではなく、蛍光灯をはずして天井裏に上半身を取り出し、送られてきた LAN ケーブルを次に送り、教室に引き込んで、そして自分たちの手で情報コンセントを取りつけていきます。遠方から駆けつけたボランティアも、学校の教職員も、地域の人びとも、みんながひとつに溶け込んでいました。

生命を持たないネットワークに人の手が触れることで生命を与えられていくようなそんな感動と、充実した達成感、心地よい疲労感で満たされた一日となりました。

別れぎわに交わした挨拶は「またやりましょう」でした。同時に、事故もなく無事に終わってホッとしたというのが正直な思いでした。

この最初のネットデイが投げかけた波紋はとても大きいものでした。とりわけ次の 2 つの点が初めて誰の目にも見えるようになったことです。

- ・ ネットデイというのはどういう催しなのか。
- ・ 教室からインターネットが利用できるというのはどういうことなのか。

とくに後者に関しては、M 小学校の教員による積極的な活用がありました。ネットデイ開催後に開かれた公開授業では、こんな光景が見られたそうです。

授業中、生徒はさっと立ち上がって教室の前に行き、ノートパソコンを黒板横の情報コンセントにつないでインターネットで必要な情報を手に入れたかと思うと、今度は自分の机に戻ってノートに書き物をしている。インターネットを少しも特別なものとは見ていない子どもの姿です。

パソコン教室にパソコンがあると、教員はどうしても一斉授業を考えます。ところが情報コンセントを設置した教室では、子どもたちは使いたいときに自由に使い、パソコンを

意識することなく、自分の学習に取り入れているのです。もちろん、それをうまく指導している教員の力を無視することはできません。

「パソコンというのは、こういうものでいいのか」

と、公開授業を見にきた氷上郡内の他校の教員の目を見張らせました。そして、その中から「うちの学校も、ぜひこうしたい。それには、どうすればいいのだろうか」と、次のネットデイの名乗りを上げる教員が現れたのです。

別の町にある T 小学校の O 先生です。

#### NeS-K メーリングリスト立ち上げ

NeS-K もゆっくりと成長していきました。

関西人すべてがそうだというわけではありませんが、M 小学校ネットデイに参加したメンバーは、どうも群れ集まるのが好きではないようです。M 小学校ネットデイが終わったあとも、ボランティア組織を作るという話は誰の口からも出ませんでした。

しかし、そのうち「やっぱりこのままやったらあかん」という話が出て、ひとまず連絡用のメーリングリストを立ち上げることにしました。

名前が必要なので「ネットワークサポートセンターin かんさい」(略称 NeS-K)としました。ネットデイを実施するだけでなく、最終的には学校情報化の全般にわたって支援する必要があるというイメージです。

正確にいうと、通産省の補正予算枠で約 500 億円の「教育の情報化推進事業」が公募され、そこからいくらかでもとれないだろうかという下心があったことは否定しません(結局、応募しませんでした)。

NeS-K メーリングリストは 1998 年 6 月 5 日にスタートしました。

そのころ、各地のネットデイ実施団体が共同してネットデイマニュアルを作成しようという動きがあり、NeS-K にはたまたま出版社社長、フリーライターがメンバーに加わっていたことから、編集委員会の事務局を担当することになりました。各地のノウハウを 1 冊にまとめることで、氷上郡で予定しているネットデイに還元したいと願ったからです。

ネットデイマニュアルのためのメーリングリスト(ndbook)を 7 月 9 日に開設し、長野県白馬村で開かれた編集会議(8 月 22・23 日)には 5 人のメンバーが参加しました。

これと並行して、氷上郡では次のネットデイ実施に向けて着々と下準備が進められていました。

そのひとつは、9 月 5 日に実施された氷上郡教育委員会ネットデイです。教育委員会内でのネットワーク利用を推進するため、別棟にある学校間ネットワークのサーバ室(教育研究所)からネットワーク配線を延長する工事です。それを教育委員会の有志でおこなうことによって、学校教育課だけでなく教育委員会全体にネットデイを認知してもらおうというネライです。

みずからのネットワーク配線をネットデイ方式で工事した教育委員会は、全国でもあまり例がないでしょう。

この氷上郡教育委員会ネットデイにはメンバー4人が参加し、同時に、すでに名乗りを上げているT小学校のネットデイが実施可能かどうかもち合わせました。

#### 顔の見える組織に

T小学校ネットデイの実施に関しては、氷上郡教育委員会のKさんがコーディネートを進めていましたが、町行政との交渉が難航していました。第2章で詳しく述べられているように、次のような疑問が出されました。

- ・校内LANを構築するのは行政の仕事ではないのか。
- ・1校だけ先行して整備するのは教育の機会均等という点で気になる。
- ・構築した環境のメンテナンスは誰がおこなうのか。
- ・ボランティアというのはどのような人たちか。

多くの行政がごく当たり前にそう考える疑問です。

これらの疑問に対してどう答えるかより、コーディネータにあたっているKさんを後方から支援する方法を考えました。NeS-Kのメンバーが氷上郡に出張って行ったところで、足手まといになるのがせいぜい関の山です。

NeS-Kを顔の見える組織にすることを考えました。

行政との共同歩調が欠かせない以上、行政のプロトコル(手順)に合わせる必要があります。そのためには書類上の必要な要件を満たしておくことが欠かせません。

規則を持つことには少なからぬ反撥もありましたが、9月19日に設立総会を開き、会則を定め、代表、事務長、会計の3役と会費を決め、そして名刺を作ったのです。サポーターを募るためのプレゼン資料も作成しました。設立総会といっても、その正体は宴会といってよいものでした。

名刺作成にあたっては、まずロゴをデザインし、そのロゴをワンポイントとして配置して、pdfファイルで配布し、各自でプリントアウトしました。

これで下の2つの疑問には胸を張って答えられます。町行政が不安視しているメンテナンスは、最終的には学校と教育委員会が受け持つにしても、体裁としてはNeS-Kメンバーリストを通じてNeS-Kがおこなう形をとることができます。

しかし、上の2つの疑問については、ゆっくり時間をかけるしかありませんでした。

O先生が切望していたT小学校のネットデイは、いったん11月末実施に決まりかけたのですが、流れてしまいました。今度は別の理由から、でした。

せっかく校内ネットワークを敷設しても、肝心のパソコンがなければ教室から利用できないので、整備後のパソコン導入について検討したい、というものです。

秋といえば新年度の当初予算の骨格はすでに固まっています。そういう不自由な仕組みの中で町行政として検討を重ね、10月の半ば過ぎになって、パソコンの整備費を当初予算に計上することが決められたのです。

そして、それを受けて、T 小学校ネットデイは年明けの 1 月下旬の日曜 (29 日) と決まりました。待ちかねた第 2 弾です。

#### T 小学校ネットデイの工事概要

2 校目の T 小学校は、氷上郡の最北部にあります。1 学年 1 クラスの小さな学校で、鉄筋 3 階建ての校舎の中に入ると、携帯電話は圏外になってしまうような立地です。

O 先生は音楽の担当ですが、学校内の情報教育を引っ張っています。M 小学校の公開授業を見て以来、熱にうなされたように「ネットデイをやりたい。うちでもやりたい」と念じ続けていたのです。この O 先生の奔走によって、保護者がネットデイの実行委員長を引き受けてくれました。

私たち NeS-K も腰が定まりました。それは次の 2 点を確認したことです。

- ・当日の配線工事は教職員 (学校、氷上郡内) と保護者が主体になっておこなう。
- ・できるだけ簡明な工法を採用して、参加意識を持ってもらう。

最初の M 小学校ネットデイの段取りの悪さを反省したこともあります。そして、ボランティアが工事をしてくれるという意識を取り除いてもらうためもあって、工事の主体のほとんどを学校を中心とする人たちに移すことにしました。

NeS-K としての仕事も次の 5 つに絞られました。

- ・事前の各種コーディネート
- ・ネットデイ LAN の設計
- ・部材の調達
- ・技術指導と技術移転
- ・難工事箇所の配線
- ・配線の動作確認

M 小学校ネットデイのあと、全国各地で実施されたネットデイに極力、メンバーの誰かが参加しながら、たどりついたのは、ネットデイは学校と地域を結びつける触媒ではないだろうかというまだ漠然とした期待でした。

#### 【フロア間配線】

T 小学校は 2 階にあるパソコン教室に ISDN 回線が引きこまれ、パソコン教室内 LAN がインターネットに接続されていました。また、1 階にある職員室にも弱電端子盤を通して LAN ケーブルが延長され、校内ではパソコン教室と職員室の 2 カ所でインターネットが利用できるようになっていました。

フロア間配線は、各階に設置された弱電端子盤を結ぶ空き配管があったため、2 3

階はそれを利用し、2 1 階は職員室まで延長されている LAN ケーブルを利用することにしました。また、下見で空き配管を確認するためにスチールワイヤを通したさい、メッセンジャー（被服つきハリガネ）を通しておきました。

そして、各階の弱電端子盤の中にハブを設置し、そこから各教室に配線することにし、ハブ用の電源は学校を通して電気工事業の PTA に依頼しました。

天井パネルは 1 枚あたり約 20 個のネジで止められていますが、T 小学校の天井パネルのネジはトノコで塗り固めた上を塗装されているため、見た目ではネジの頭が見えません。このためネジの頭出しには相当な時間を要することが予測されたことから、ネジの頭出し作業は T 小学校の教職員に、当日までにすませておいてもらうよう依頼しました。

手間のかかる作業ですが、当日の作業をスムーズに進行させるための下準備です。

### 【教室間配線】

各階の教室へは、弱電端子盤の中に設置したハブから配線しました。廊下と教室の天井裏はコンクリート壁で遮られていることから、天井裏を転がし配線したケーブルを教室前の廊下側でいったん引き出し、窓のアルミサッシ枠を貫通して教室内に入れ、情報コンセントまではモールで処理することにしました。

教室前の廊下側でいったん引き出す部分には、あぶくま地域で考案された「コタツ足工法」を採用しました。径 25mm のホルソーで天井パネルに穴を開けてケーブルを引き出したあと、その穴を内径 21mm のコタツの足カバーでふさぐ方法です。

これは後日談ですが、当日、径 25mm の穴を開けられた天井パネルを見て、視察に来た町職員はギョッとした顔を見せましたが、あとでコタツ足でふさぐと、感心したように納得していました。

そして、窓のアルミサッシ枠の貫通は径 6.5mm のドリルです。

2 階の視聴覚室はサッシ枠貫通のルートが取れなかったため、ここだけは例外として当日 NeS-K のメンバーが専従で既設配管を利用したルートで配線することにしました。

下見では、以上の点を確認し、必要な部材を洗い出して調達し、当日を迎えました。

このネットデイでは NeS-K のメンバー有志が前日から T 小学校に入り、学校近くの宿泊施設に 1 泊しました。そして、フロア間配線と弱電端子盤まわりの作業を前日のうちにすませました。これは、当日は各階いっせいに教室間配線にとりかかるとの理由です。また、工事開始に先立って各階班のリーダーに工事概要を説明しなければなりません。遅刻は許されないことも前日から泊まり込んだ理由です。

もうひとつ、夜はささやかな前夜祭というネライもありました。

当日は約 50 人が集まり、1~3 階の各階班に分かれ、作業を進めました。T 小学校の準備によって 1 フロアにつき最低 4 脚ずつの脚立がそろっていたうえ、天井パネルのネジの頭出しもほとんど終わっていたため、全 13 教室への配線はほとんど午前中だけで終了し、

午後からは教室内のモール処理が残るだけになりました。

あっ気を取られるような手際よさでした。午後 3 時すぎには配線が終了し、持ち込んだフルークで計測して OK が出ました。

昼休みには参加者全員を対象にしたケーブル成端講習会、作業終了後には教頭による開通式という 2 つのイベントを実施したことも付け加えておきます。開通式もあぶくま地域で最初に実施されたネットデイを盛り上げる演出のひとつです。

### ネットデイは経験値

3 校目の S 小学校は、建物構造がほとんど同じだったため、2 校目の T 小学校と同様のネットデイ LAN を設計しました。

T 小学校ネットデイには間に合わなかったのですが、2 月 1 日に NeS-K としてドメイン名を取得しました。ようやく自立したサーバ運営が可能になり、他の機関に間借りしていた各種メーリングリストを NeS-K に移しました。

そして、S 小学校ネットデイの実施に向けた準備メーリングリストを開設しました。メーリングリストの参加者は約 50 人にのぼりました。

資料類も参加者全員が共有できるよう初めて事前に Web を使って公開しました。

このように「初めて」の試みをふんだんに盛り込んだネットデイとなり、当日、モール処理班を独立して各教室のモール張りを担当したのもそのひとつです。また余ったケーブルの処理にスパイラルチューブなどの配線材を使用したため、工事の仕上がりは洗練されたものになりました。

参加意識を高めるために簡明な工法を採用しても、回線の品質と仕上がりの美しさを維持できるわけです。これは氷上郡の中で中心になって情報教育を進めている教員たちやネットデイ参加者のスキルが向上したことが大きな要因です。もちろん NeS-K も経験値を高めたことはいうまでもありません。

この S 小学校ネットデイでは、新しいノウハウも生まれました。天上パネルのネジをはずすとき、トノコで塗り固められたネジの場所を探し当てる方法です。理科室にある細い棒磁石を利用すると、ピンポイントで突き止めることができます。これは S 小学校の教頭先生が考え出したアイデアでした。

また、T 小学校ネットデイと S 小学校ネットデイの間に、阪神間で「夢プロジェクト」というイベントが開かれたさい、参加校のうち唯一ネットデイを実施した伊丹市の 2 小学校には、氷上郡から郡境を越えて教員たち約 10 人が応援にかけつけ、作業を手伝いました。

### 学校と地域を結ぶ触媒

ネットデイを実施したことによって何が変わったのでしょうか。

念力でネットデイを自校に呼び込んだ T 小学校の O 先生は、半年後に自校のネットデイを振り返って、参加効果を次のようにまとめました。

- ・職員にネットワークの便利さと活用の必要性を意識させることができる。現在、本校職員全員個人 PC (パソコン) を購入！
- ・地域の関心が高まり、学校 HP (ホームページ) が更新できていないとお叱り！ 楽しみにされているみたいです。
- ・PTA から今年もインタ - ネット講座等を開きましようとお声を頂いており、実施。その後、数回予定
- ・全校生が PC の活用に抵抗がなくなってきた。1 年生大喜び。
- ・ボランティアを受け入れ、人と人のネットワークが広がる。広い視野に立って、教育活動が展開できる自信みたいなものを感じる。職員に自信がついてきている。
- ・参加した人が自分の職場でネットデイを展開しつつある。意義価値を認めつつ！

このまとめを読んで、すっかりビビってしまった NeS-K メンバーは少なくありませんでした。「ビビる」とは関西弁で「脅える」「縮み上がる」といった意味です。この迫力にはとてもかないません。

〇先生の強い思い入れの分を差し引いても、私たちの期待をはるかに越えた「ネットデイ効果」がもたらされたようです。

しかし、これは単なる成功事例ではないのです。ネットデイを実施すれば、どこの学校でもかならずこういう効果が出るというわけではありません。

〇先生はネットデイを実施するために越えなければならないハードルを順に 3 つあげます。

教職員

保護者

行政 (町行政)

これらのハードルを越えるためには、やはり半年以上の時間が必要だったそうです。結果的に T 小学校ネットデイの実施が遅れたため、それだけ事前準備に時間をかけることができた、ともいえそうです。

ネットデイをやりたいと願う教員がいる。それに応えるボランティアがいる。しかし、それだけでネットデイを開催できるわけではありません。

ネットデイにかかわる人間が、それぞれの立場で、しんどいめをしてコーディネートを続ける理由を、教育委員会の K さんはこう代弁します。

「ネットデイは田植えと一緒になんです。昔は村人が総出で田植えを手伝いました。ぼくも子どものころ、大人にまじって田植えを手伝いました。しかし今はそういう共同体的なものがなくなって、子どもたちもタテ社会で徒党を組まなくなった。それは大人が捨てたから、子どもも捨てたんです。子どもが悪いわけじゃない」

まさに、言い得て妙の言葉だと思います。

#### お互いの顔が見えるネットデイ

氷上郡では教員たちによる自主研究会「氷上情報教育研究会」が古くから組織され、活発な取り組みを進めています。ネットデイの中心的な役割をになったのも、この氷上情報研のメンバーです。

内側にそのような教員同士の人の輪があり、その外側を NeS-K という人の輪が取り囲んでいる。氷上郡ネットデイをひと筆で描いてみると、人の輪がつながっていることに気づきます。

町行政との共同歩調は欠かせませんが、平等な整備を金科玉条に掲げる行政は、管内全校でのネットデイ実施を望みます。その結果、町行政に背中を押され、学校内の体制が整っていないのに、名乗りをあげた学校もありました。

しかし、それは筋が違います。中止になりました。実際にそんな例もありました。

氷上郡では、名乗りを上げさえすればネットデイができるわけではないことを、ほかならない、ネットデイを実施した学校の教員たちが一番よく知っています。その経験を共有する人の輪の中で、次のネットデイの準備を、ゆっくりと、そして虎視眈々と、進めているのです。

すでにボスキャラを倒せるほど氷上郡の中で経験値は蓄積しており、氷上郡の教員や保護者たちは独自に「ネットワークサポートセンターin ひかみ」(NeS-H)としてまとまっています。旗揚げはしないかもしれませんが、とても強靱なまとまりです。

イタリア語の「カンパネラ」には、1つの教会の鐘の音が聞こえる範囲の土地という意味があるそうです。インターネット時代を迎えたいま、地続きのつながりはますます大切になっています。

NeS-K は関西という大風呂敷を広げていますが、「ネットワークサポートセンターin ひかみ」は地続きの地域の中で生まれ、地域に根ざした学校支援活動をおこなっていくことでしょう。もちろん NeS-K もその活動をサポートします。

#### やることはいっぱい

氷上郡では次に N 小学校 (K 町) のネットデイを秋に予定しています。すでに下見を兼ねた技術講習会を実施し、準備は終わっています。

また、隣接する丹波地域を中心に計画されているネットデイには、地続きの地の利を生かして、氷上郡の教員たちが準備段階から協力し、積み上げてきたノウハウを提供することになりました。

兵庫県の播磨地域でも、地元のボランティア組織によってネットデイの実施が計画されています。そして、滋賀県の学校でも「ネットデイ講習会」を計画しています。これはネットデイ技術講習会と実際のネットデイ参加をセットにしたものです。

このような急速な広がりを、果たして NeS-K の貧弱な体力で維持していけるかどうか、

正直なところ不安も感じます。しかし、原点に立ち返って、どのような支援が可能なのかという問題点と、それにはどうすればよいかという解決策を、少しずつでも明らかにしていきたいと思います。

ネットデイには2つの側面があるように見えます。

ひとつはボランティア活動であること、もうひとつは世直し運動であることです。技術や技能を持った人がそれらを持たない人をおぎない支える喜び、それとともに、全国的に見るといびつな形でしか進んでいかない学校情報化の実態に対するイラ立ち、この2つがネットデイボランティアを支えています。

それらのほどよい調和がネットデイといえるような気がします。どちらが勝ってもいけないと思います。

ボランティアの歴史を持たないこの国で、まだまだ手探りの状態が続くでしょうが、NeS-Kのポリシーがあるとすれば、次のひとことに要約されるかもしれません。

「本当に必要としているところに、必要としているものを」

何か新しいものが出たみたいだからほしいな、というだけでは、

「そんなにほしかったら、ご自分でお買いなさい。自分では何もしないのに、わがままばかりいうんじゃないの」

と、たしなめます。生意気なようですが、ボランティアにもできることとできないことがあるのです。

本当に必要とするニーズがもっと増えてほしいと願っています。なぜなら、ボランティアはニーズの海で生命を与えられるからです。

やることはまだまだいっぱいありそうです。

(釘田寿一)

## 2 ネットデイへの思い～教育委員会の立場から

### ネットデイとの出会い

あれは、平成9年度だったと思います。M小学校のA教諭から「研究発表会の時、教室からインターネットがしたいんですけど、ケーブルを引いてもいいですか?」。私は「いいよ」と答えました。

そして、研究会当日。私が目にしたのは、ターザンの渡り蔓というか、お誕生日会の飾りと言えいいのか、おせいじにもきれいとは言えない格好でケーブルが教室まで引き込まれていました。

氷上郡教育委員会では、平成6年度の基本方針の中に、コンピュータ室の整備だけでなく、校内LANまでの整備を年次毎に推進することを盛り込み、各町総務課にも伝えていました。

でも、こんなに早く校内LANを望む学校が出てくるとは想像していませんでした。研究会の中の子どもたちを見ていると、教室に準備された数台のノートパソコンを使い、大人の興奮をよそに、今までずっとつきあってきたかのように道具として学習を進めていました。

子どもたちにとってコンピュータは珍しい道具ではなくなっているのです。コンピュータ室という特別の部屋の中だけにしかない、そこに行かなければ使えない学習環境では、本当の意味での道具にはなりません。でも、平成9年度と言え、コンピュータ教室の整備が始まった年です。いくら何でも校内LANの整備までは町行政にお願いすることはできませんでした。

「子どもたちと学習環境」のことで悩んでいた矢先、M小学校の研究会に参加されていたKさん（現在ネットワークサポートセンターinかんさい事務長）からネットデイの話を持ちかけられました。

「ネットデイ??」いったい何のことなのか最初はわかりませんでした。インターネットや知人等から情報を収集し、ボランティアによる活動であることがわかってきました。

しかし、教育行政として、ボランティア団体の信頼度、ボランティアの技術力、また、問題が起きた場合の責任の所在等々、すぐには受け入れることはできませんでした。その一方で、研究会の時の子どもの笑顔、先生方の情熱等を消したくないという思いも強くありました、そこで、伊丹や姫路といったネットデイの経験のあるところから再度情報を収集し直しました。その中で、これから学校に一番求められるであろう「コミュニティ」というキーワードが浮かび上がってきました。子どもや保護者、地域の人々、そして学校が一体となって取り組むことの重要性を指導している教育委員会として、このネットデイという活動は新しい可能性を与えてくれるのではないかと考えるようになってきました。

### 教育行政の役割

コミュニティというキーワードを持ち、しかも子どもや現場教師の側に立った学習環境

を創造するネットデイ。教育行政は何をすべきなのでしょう？ 氷上郡教育委員会がとった経緯を通して考えたいと思います。

#### (1) 教育委員会内の共通理解

教育行政である教育委員会が、ネットデイという活動をどう捉え、どのような位置づけにするのかが大きなポイントとなります。氷上郡教育委員会では次のように位置づけました。

##### 1) 人材育成と教職員の意欲支援

毎回議会等から指摘される一つに人材育成の問題があります。各町に整備していただいた学習環境を子どもたちが自由に使い、子どもたちの学習ツールとして活用されるためには、この問題は避けては通れないと考えています。

そこで、自主研修講座や指導者の育成講座等を精力的に開催し、人材育成に努めてきました。

今回M小学校のケーブル引き込みは、教職員の意欲の表れであると同時に、人が育ってきた証であると考え、教育委員会としては人材育成の視点からネットデイを受け入れ、できるだけの支援をすべきであると共通理解しました。

##### 2) Research and Development

国は「学校外の人材の活用」を推進すると同時に、学校側のボランティア受け入れ態勢作りを求めています。

今後は、ボランティア等の学校参加はますます増加すると考えられます。そこで、教育委員会としては、ネットデイはR&Dともとらえ、これらの活動を通して生じた問題等を整理したり、手だてを考えたりすることは大変重要であり、しかもこれからの教育に役立つ可能性が高いと考えました。

#### (2) 町行政への働きかけ

氷上郡教育委員会は6町共同設置という全国でも希な共同設置の教育委員会です。町行政の働きかけについては、学校の設置者である各町の実態に応じて対応を進めていきました。

##### 1) M小学校の場合 (I町)

役場総務課に行き、M小学校の希望やネットデイについて説明しました。幸いM小学校は日頃から、積極的に情報教育を推進している学校でもあり、役場の反応はすごくよく、話も順調に進みました。その上、M小学校の校長が役場に出向き「子どものためになることなら何でもやると言うのが本校の信条である」と、事前をお願いされていたそうで、話はトントン拍子に進みました。

この町の場合は特別かも知れませんが、この町との話し合いを通じて感じたこと

は、日頃の取り組みや学校長の積極的な動きというのが大切であることを痛感しました。日頃の実践なくしてはこうはいかなかったと思います。

## 2) T小学校の場合 (A町)

T小学校は、M小学校のネットデイに参加された教師がいる学校で、その後のM小学校の取り組みを聞いて以前からネットデイをしたいという思いの強い学校でした。

T小学校の場合もすぐに役場総務課に出向きました。この町では、いくつかの質問が出され、その日にはOKは出ませんでした。

主な質問項目は次の通りです。

- ・ 校内LANを構築するというのは、我々行政の仕事ではないんですか？ 教育委員会も整備方針を出されているし、あえてボランティアを活用する必要はあるのですか？
- ・ 町行政の立場から言うと、教育の機会均等が非常に気になります。T小学校だけ先行して整備するというのは問題があるように思います。他の学校はどのような考えを持っているのでしょうか？
- ・ ボランティアで構築した環境のメンテナンスは誰が行うのですか？
- ・ ネットデイに参加されるボランティアの方々というのはどのような人たちなのでしょう？ 技術力や信用という点ではどうなのでしょう？

確かに町行政としては当然の心配されることばかりです。ボランティア団体の技術力や信用と言うことについては、我々自身も最初気になったことです。

この後、質問事項を中心とした会やT小学校を交えた会等何回か持ちました。確かにM小学校の時に比べ、理解を得るまでには相当の時間を費やしました。

しかし、ここをいい加減にして進めていくことはできません。コミュニティづくりを目指すなら、教育行政、町行政や学校がまず共通理解をしなければ、本当の意味で子ども側に立った環境づくりにはならないと考えたからです。

その甲斐があったといううれしい展開を最後は見せました。というのは、役場の方から次のような提案があったのです。

「ネットワークだけ整備しても、肝心のコンピュータがなければ子どもたちにとってすばらしい環境とは言えないんじゃないですか？」

確かにその通りです。でもそこまでは要求事項の中に入れていなかったのです。学校側からは「コンピュータ室のコンピュータを外して活用しようと考えています」。そのとき役場から、「使うたびにそんなことをするんですか？ それは困るでしょう。わかりました。必要な台数をあげて下さい。整備しましょう。子どものための学習環境づくりなんですから」

何度も足を運び、学校の思いや子どもたちの環境づくりについて議論を重ねてきたこ

とは間違っていなかったのです。

### (3) 教育行政とネットデイ

ネットデイを成功させる第一歩は、教育委員会や学校が絶えず子どもを中心に据えた議論を行うことです。子ども抜きの学習環境なんてあるはずがありません。また、子どものための環境を早く作りたいと願う教職員の意欲も抜きには考えられません。

これからの教育委員会は、どこよりも時代の流れを早く察知し、その時々柔軟に対応していける力やコーディネーターとしての役割が今後重要になるのではないのでしょうか？

学校には、子どもためにしたいことが山ほどあります。しかし、ネットデイは、学校だけの思いで単独で計画・実施することは、後々大きな問題を残す可能性があります。そんな学校の思いを教育行政としてどのように受けとめるのか、地方分権が進む中で教育行政の主体性は今後の教育を大きく左右すると思います。

氷上郡の場合、当初ネットデイの存在を十分に把握していなかったため、最初の1校だけは、教育委員会から学校に話を持ちかけました。しかし、決して強制はしませんでした。ネットデイは学校の思いを無視しては決して成功はしないからです。後は学校の判断に任せました。学校長から「子どものためになるならやろう。全員一致で決まりました」と返事がありました。

教育委員会のやることはただ一つです。設置者である町行政への理解を取り付けることです。何度足を運んでも、その向こうには子どもたちのための環境が実現するんだと思うと一つも苦勞とは感じません。

氷上が少しずつ軌道に乗りつつあるのは、学校、教育行政、町行政がそれぞれに役割を自覚し、連携することができたからだと思います。どれ一つ抜けてもネットデイは成功しないのではないのでしょうか？

### ネットデイへの支援

氷上郡では、これまでに3校のネットデイを終えることができました。その取り組みの中で一つの課題が生まれました。氷上郡の場合、ネットデイを実施するにあたって「ネットワークサポートセンターinかんさい(以下NeS-Kという)の支援を受けています。」そのメンバーの多くは、大阪や京都在住者で、氷上からは遠く離れています。

1校のネットデイを実施するには、最低でも3回氷上の地にNeS-Kメンバーが訪れます。それにかかる旅費等は全てメンバーの個人負担です。いくらボランティアといっても、ネットデイが何度も続くとメンバーの負担は増大し、やがては参加したくても・・・という状況が生まれ、体力的に続かなくなるのではないかという心配です。

そこで、ボランティア活動を支援していただける団体を探そうと考えました。そうすればコミュニティの範囲が広がり、益々いいのではないかと考えたのです。しかし、教育委員会がボランティアの支援を頼むことはできませんので、Nes-Kのメンバーとしているんな所を訪ね、支援を呼びかけました。

なかなか支援が頂ける団体がなく、四苦八苦しましたが、幸いなことに2つの団体から支援を頂けることになりました。

ネットデイを実現、成功させたり、長く活動していくためにはいろんな問題があります。でも、焦らず一つ一つ知恵を出しながら解決していくことが大切だと思います。

#### ネットデイと学校

教育委員会として大切にしてきたことがもう一つあります。それは、できた環境を今後どのように教育に生かすのかということです。

つまり、できた環境をいち早く子どもに開放し、実際に教育に生かすことです。ネットデイは、ネットワークを張って終わりではないのです。その環境を使ってこそ、1つのネットデイが終了するのです。ネットデイでの活動は環境を構築することではありません。活動を支えているのは「子どもたちに」という熱き思いです。

氷上郡では、その点を十分学校に理解してもらい今日まで実践してきました。次の章でその点について紹介したいと思います。

(岸田隆博)

### 3 ネットデイへの思い～学校の立場から

「教室でやりたい」と5年生

M小学校では、数年前から情報教育に取り組んでいました。子どもたちの情報活用能力を育成するために、コンピュータも道具の一つなのだと位置づけて授業の中で活用してきました。

学校には、コンピュータ室にデスクトップ機が10台設置され、ネットワークでつながれていました。コンピュータを使って情報を収集したり、まとめたり、発信したりするのは全てコンピュータ室で行っていました。移動することも不可能ではありませんでしたが、ケーブルをはずして重い機械を運んで活用したことはありませんでした。

情報教育の取り組みの成果を発表する研究会の打ち合わせをしているときのことで、5年生が「自分たちのクラスのホームページを作る相談を、教室でやりたい」ということになりました。他校のホームページも参考にしながら相談をしたいけど、普段勉強している教室でやりたいというのです。

ケーブルを延ばせば何とかかなるかと思いきや、自前で配線しました。研究会には多くの方がお見えになるので見栄えも気にしながら、壁の隅にきれいに(?)線を貼っていきました。ノートパソコンを接続してテスト、見事に接続しました。ただ、研究会当日は子どもたちの話し合いが盛り上がり、この配線を利用する場面はありませんでした。

無駄になったようにも見えますが、決してそうは思いませんでした。子どもたちが必要だと感じたときに、必要な場面で自由に使ってこそ道具になりうるんだと思います。今回は使わなかったけれど、必要な場面でいつでも使える環境を作ることができたのは無駄ではなかったと思います。

その研究会も閉会となり、ホッとしたときです。取材にこられていたK氏がニコニコとほほえみながら近づいてこられました。そして、「あのケーブル大丈夫ですか？ 防火シャッター閉まりませんか」と言われました。あわててケーブルを見てみると、なんと前日配線したケーブルは防火シャッターの下をくぐり、おまけにダラーンと垂れ下がっているではありませんか。

その時はじめて「ネットデイ」という言葉を聞きました。

子どもたちのためになることなら

「やりませんか？」というお誘い(悪魔のささやき?)に、「そんなことができるのなら、是非お願いします」と答えました。その後、43日後にネットデイを実施し、校内LANが整備されたのですが、その間校内では何度も話し合いを持ちました。何しろ情報担当者の独断でK氏に「はい」とお返事してしまったのですから、校内の意思統一をしなければなりません。

「ネットデイって何？」

から始まり、

「校内 LAN が整備されると何ができるの？」

「ボランティアの人たちにできるの？」

「お金は？」

「休みの日にするの？」・・・

とにかく初めてだったので、意思統一には時間を要しました。

コンピュータ室の中にコンピュータがある状況では、利用時間は限られています。授業時間だけでなく、休み時間もコンピュータ室を解放して自由に使わせていましたが、それでも、コンピュータはコンピュータ室に行かないと使うことの出来ない特別な道具だったのです。ネットデイによって校内 LAN が整備されることによって、パソコン室でないと利用できないという制限から解放され、いつでもどこでも利用可能な道具になり得るのではないかと考えました。そして、みんなで話し合っていくことで「子どもたちのためになることなら、やろう！」という意思統一ができました。

「さあ、これで OK」ではありません。公立の学校ですから工事をするためには、町役場に OK をもらわなければなりません。役場へのお願いは学校からもしましたが、教育委員会からの働きかけが大きかったと思います。たびたび足を運んでもらい、説明し、理解を求めていただきました。これでやっと GO サインです。この GO サインが出たのは、実施予定日の数日前でした。

さあ、準備です。とといても何をすればいいのかわかりません。やったことといえば、情報コンセントを設置する場所の確認と教室の掃除、参加者名簿（参加者に書いてもらうので枠だけ）の準備ぐらいです。「わからない」というのは強いものです。何も準備らしい準備もせず、すべてサポートセンターにお任せして当日を迎えました。

#### 生き生きした参加者の表情

いよいよネットデイ当日です。3月末の日曜日、総勢 50 人で始まりました。午前中はルート確認する数名を除いて、ケーブル成端講習会が行われました。8 本の細いケーブルと細かい端子に四苦八苦です。

丁寧に説明してもらったにもかかわらず、ケーブルの色（順番）を間違えてやり直し。端子の奥までケーブルが届いていなくてやり直し。自分の出来映えに納得がいかずやり直し……端子から 3 cm ほどケーブルを残した切れ端が、床に散乱しました。何度もやり直しをしているのに、会場の雰囲気はとても明るいのです。あちらこちらから笑い声や歓声が聞こえてきます。どの顔も生き生きとしています。きっと、「自分たちの手で子どもたちに素晴らしい環境をプレゼントしよう！」と言う思いが、参加者の表情を生き生きとさせていたのだと思います。

そんな中ひととき大きな歓声があがりました。出来上がったケーブルをフルークという機械でテストしているのです。ケーブルの出来映えが数字で表示されます。大きな歓声の中心にいたのは子どもでした。なんとそれまで大人が作ったケーブルよりも高い数字が出たのです。負けじと頑張る大人達。でも、なかなか記録を破ることはできませんでした。

このとき、何回挑戦しても子どもの記録に及ばず、以後のネットデイでは絶対にケーブルの成端をしないと誓われた方がいらっしやるとか……とにかく和気藹々と講習会が行われました。

午前中にルート確認も終わり、午後はいよいよ配線作業です。築後間もない校舎なのでかなり気を使いながら作業が行われました。天井板がはずせないの、蛍光灯をはずして天井裏へ配線していきました。作業は順調に進んでいると思っていたのですが、気が付くともう日が暮れて外は真っ暗です。後少しです。でも、最後の数メートルにケーブルが通りません。天井から壁を通して床下へ……ようやく開通しました。このとき時刻は確か午後8時でした。さすがに疲れの色は隠せませんでした、自分たちの手で子どもたちに大きなプレゼントができた喜びでどの顔も満足げでした。

#### 必要なときに自由に使う子どもたち

ネットデイによって整備された環境は、子どもたちにごく自然な形で受け入れられました。教室にコンピュータがあること、教室からインターネットができることに別段驚いた様子はありませんでした。「あっ、ここからもできるんや……。便利になったなあ」程度でした。

社会科の授業の時です。子どもたちがそれぞれの課題について調べ、まとめる作業をしていました。模造紙や画用紙、OHPのシートなど思い思いのものでまとめています。そんな中ノートパソコンを使っている子がいました。インターネットを使って調べています。隣でも同じようにノートパソコンを使っている子がいます。コンピュータ室でなら何も不思議に思わないところなのですが、

「あれ、ネットデイで整備したのは教室に情報コンセント1つだったはずなのに……」

教室の中をよく見ると情報コンセントの横にハブが置いてあります。そこからケーブルが教室の床をはい回っています。そうなんです。たった1個の情報コンセントでも、ハブを置けば(段数に制限がありますが)複数台のコンピュータが同時利用できるのです。

驚く私を後目に担任の先生は、

「4人の子どもが使いたいと言ったから、勝手にやったけど、あかんかった？ 線あまっていたし……」

「……」

子どもも先生も気軽にコンピュータ(校内LAN)を活用することができました。

理科の授業では子どもたちが自分の意見を発表していました。模造紙に書いて説明していたのですが、どうもうまく伝わりません。それに、発表に使っている資料が信頼できるかどうか疑われています。そのとき、発表していた子はサッと教室の隅に置かれたノートパソコンの所へ行き、自分の情報源としたWEBページを開きました。そして、そのWEBページを指し示しながら見事に自分の考えを説明しました。周りの子どもたちも納得です。もしこのとき、教室でWEBページを見ることができなかつたら、この子は「インターネ

ットで調べました」と口頭で説明するしかありません。これではおそらくみんなを納得させることはできなかったでしょう。

このように、M 小学校では教室で 1 時間中全員がコンピュータを使って授業を行うことはほとんどありませんでした。コンピュータのない教室で行っていた授業の中で、必要なときに、必要な子どもが、自由に使う授業が行われていきました。

町役場の理解を得るために

M 小学校のネットデイには、郡内の小学校からも多くの先生が参加しました。その中に T 小学校の O 先生がいました。大変情熱的で「これはいい!」と思ったらまっすぐ突き進む(はまりやすい)先生です。様々な職種のボランティアの人たちと一緒に作業し、話をし、一緒に汗を流す。そして、子どもたちのために素晴らしい環境が出来上がっていく。そんな様子を見るともう止まりません。

「是非、T 小学校でもネットデイを!」

と活動開始です。次の資料は T 小学校が校内の意思統一をするために、また、町役場の理解を求めるためにまとめられたものです。

設置場所における活用目的及び内容

設置場所	活用の内容と目的
各教室に設置したことによって	<p>基本的な操作を自然と身につけることができる（リテラシー）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いつでもさわれる環境にあることが効果があるのでその環境にしていきたい。</li> </ul> <p>校内のネットワークを生かして、将来の情報化社会で正しく情報を選択したり人を傷つけたりせず、あたたかい人間関係を築いていく能力や態度を育てることに活かしていきたい。</p> <p>授業及び交流（国内や海外と）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インタ - ネットを使って必要な時に必要な情報を取り出せ、すぐ紹介できる利点を授業に活かしていきたい。</li> <li>・今後益々メ - ルによる交流が盛んになることは間違いなく、気軽にメ - ルの交流で学習はもちろん生活等で活用していきたい。</li> <li>・校外への観察・見学等の活動に活用していきたい。</li> <li>・児童の希望に応じて家庭への貸し出し（保護者の責任）等にも活用していきたい。</li> </ul> <p>児童会活動（ホ - ムペ - ジを開設）</p> <p>活動例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・皆遊びの予定を各各学年に送る。</li> <li>・児童会及び月の行事計画や各週委員会</li> <li>・校内のネットワークを利用して、子ども達に自分の言葉として文字で多くの子にメッセ - ジを送ったりして、体験を通してネチケットを身につけていきたい。</li> <li>・ネットワークを生かして擬似的に遠くの人との交流体験を行いながら自分の考えを使えるコミュニケーション能力を身に付けていきたい。</li> </ul> <p>朝の会の持ち方</p> <p>「例」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連絡 担任から1日の予定をメ - ルで 日直が伝える（高）</li> <li>・健康観察結果をメ - ルで送信したり、必要なデ - タを各教室から送信したりして、集計や分析に役立てる。</li> <li>・学級日誌や記録を1年間を通して児童にさせデジタルカメラで撮った画像を張り付け、学級の記録していく。</li> </ul> <p>放課後学級担任の研修や学級事務等に活用していく。</p>

	<p>・基本的にコンピュ - タ室は、本来はメディアセンタ - として情報を収集したり資料を作成したり情報を送受信したりする場所であり、教室での授業と比べると児童の学習活動に制約を受ける。</p> <p>理科室での活用</p> <p>理科の授業では、観察や実験などが多く、コンピュ - タ室での授業はできにくい。しかし、観察や実験結果をデジタルカメラで記録したり、記録したものをみんなに紹介することや今までの観察や記録や調査結果などデ - タベ - スにしたものを提示したりして授業に役立てたい。</p>
特別教室	<p>音楽室での活用</p> <p>音楽の授業では、鑑賞や表現創作の学習を中心に活用していきたい。</p> <p>鑑賞：作曲者の紹介、民謡のふるさと紹介、人々のくらしと音楽のつながり、世界の民謡と日本の民謡の比較などインタ - ネットを使って必要な情報を紹介し合って学習を深めたい。</p> <p>表現：節作り、作曲などの創作活動としてコンピュ - タ室で一斉に作った物を各自ホルダ - に保存しておき、音楽室での授業で紹介していきたい。</p> <p>コンピュ - タ室は図書室と接し、図書室での学習とかち合う場合が出てくる。よって、音を出しての学習は差し控えたい。</p> <p>ヘッドホンを設置しても、個人の作品作りには効果あるが、全体での授業としては、コンピュ - タ室での活用には無理が生じる。</p>
	<p>家庭科室での活用</p> <p>調理実習の計画、レシピ - 作成、住まいの工夫、衣服のデザイン、エプロン製作等を各自で作成したものを保存しておき、ネットワークを使って家庭科室で提示しお互いの考えを紹介し合ったり他校との学習を交流し合ったりしたい。</p> <p>安全な食品（添加物）やごみなどの環境問題についてインタ - ネットを活用して、最新の情報等を得て学習に活かしたい。</p>

<p>保健室での活用</p> <p>児童の健康観察や検査結果などを集計しデータを分析したり保存したり、児童の個人情報扱うことが多いので、他のコンピュータと使い分けた活用をする必要がある。</p> <p>また、いつでも子どもの来室を暖かく迎え、適切な処置ができるように保健室につめて仕事をする必要がある。そして、児童の健康に留意し適切な指導を行っていくためには、児童の健康状態の記録や児童の意識調査や身体測定等のデータを集計し分析して、事前指導に活かすことが大切と考える。しかし、この作業では、長期にわたりコンピュータを占有して長時間活用せざるをえない。</p> <p>そこで、保健室に1台のコンピュータを設置したい。</p> <p>そして、ネットワークを活かし保健室から各教室へ、健康に関する報発信活動の拠点として活用していきたい。</p> <p>「例1」常時活用</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・出席調査を各教室から受信する。児童の個人情報を収集する事により個人の健康記録と全校生の健康状態を把握し指導に活かしていきたい。</li><li>・保健室に来た児童の状態と手当等をカルテとして記録保存し、児童一人ひとりの健康（心の状態を含め）状態の把握と今後の指導に活かしていきたい。</li><li>・インターネットを使って保健情報を収集したり、町内及び郡内の養護担当者とメール交換や資料を交換して、保健指導のための資料（ほけんだより）作成し各教室に発信し、朝の会や学級指導に活用していきたい。</li></ul> <p>「例2」発展的に活用（児童の家庭との連絡を密にするために）</p> <p>不登校児童及びその保護者は、学校や教師という言葉に非常に敏感でストレスを感じる。また、教師の家庭訪問に対して近所の目を意識し教師の訪問を拒んだりして、教師自身の悩むところである。</p> <p>そこで、児童に対してメールの交流で心をつなぐことができないかと考えている。</p>
--

	<p><b>職員室での活用</b></p> <p>現在デスクトップの事務機 1 台あるが、他の職員の校務及び校務分掌上の活用が頻繁であり、事務の先生の仕事に支障が出ている。また、事務の仕事は機密内容が多く、他のコンピュータと分けて活用していきたい。</p> <p>そこで、頻繁に活用している校務全般に関わる発送文書及び P T A 関係の案内発送等の活用ができるコンピュータを 1 台職員室に設置し活用していきたい。</p>
	<p><b>校長室での活用</b></p> <p>氷上郡内の教育機関内のイントラネット整備によって、これまでの教育委員会からの案内はメールで送受信される予定である。それに向けて校長室に設置する。</p> <p>また、本校のホームページが本校インターネット活用規定に沿って児童の個人情報が守られているかどうかの確認や、急激に変化する教育の最新の情報等をインターネットの活用によって職員に紹介していきたい。</p> <p>今後地域はもちろん、他校や他の地域との交流が盛んになるであろう。その時に学校間及び地域との連絡を密にしていけるように活用を行っていきたい。</p>

この熱い思いは、見事に実現しました。M 小学校のネットデイから約 10 ヶ月後、T 小学校でもネットデイが実施されました。T 小学校のネットデイには P T A 会員をはじめ、地域の方も多数参加して実施されました。そしてその 2 ヶ月後、同じ思いを持っていた S 小学校にもネットデイによって校内 LAN が整備されました。

手探りの状態から始まった M 小学校のネットデイ。その取り組みが「子どもたちによりよい学習環境を！」という同じ思いをもつ郡内の先生方（学校）に伝わり、ネットデイの輪が広がっていきました。今後も、この熱い思いがどんどん広がっていくことを期待しています。

今年度もまた郡内の小学校でネットデイが実施される予定になっています。

(足立雅人)

## 4 ネットデイへの思い～ボランティアの立場から

### 私のネットデイとの出会い

4 地区合同で行った「Net Day '97 こうべ・はりま・伊丹・ハワイ」が最初でした。阪神大震災後、95年96年と神戸で開催されたインターネットウエーブに参加し、インターネットの有効性を認識すると共に、「Net Day」に興味を持ちました。カレン・R・グリーンウッドさんの講演を聴きながら、「日本で出来たらすばらしいな」と思うと共に、雲の上の運動のように思っていました。まさか自分がその当事者になるとは思ってもみませんでした。新たな人との出会いから、「伊丹も参加してみませんか」と声をかけられ、二つ返事で訳も分からず夢中で取り組みました。

「Net Day」をやり終わってみて、何をやったのか、ようやくわかったような気がしました。よくそんな臭いこと言えるな！ とヤジがありました。が、「人と人をつなげたのがネットデイ」ということです。本当にすてきな夢を持った人と会うことが出来ました。今でもそのほとんどの方とお付き合いがあります。

その一人であるKさんから氷上郡でのネットデイの話が入りました。

このいきさつについては他章に詳しいので省略しますが、まず、小学校の普通教室からインターネットをつないだ実践を行っているのに驚きました。それと共に「夢」という触手にふれたものがありました。阪神間にある伊丹市立I小学校でコンピュータ室と職員室をLANでつないだ途端、コンピュータの活用が段違いに進んだ体験があるので、「時期を逃してはならない！」と直感しました。

経験が少ないので未知の部分が多くありました。

例えば線を通すルートはどのように確保するのか(M小学校は新しい学校で空配管がきちり施工されていた)。設計の平面図ではつかみきれない部分をどのように探るのか(スチールの使い方を知らなかったし、平面図を読み切れなかった)。部材についてもハブやケーブル、コネクター程度はわかりましたが、ハブの電源を引くためのVVFケーブルやコンセント、配管ボックスに穴を開けたときの自在ブッシング等の細かなところまで見えませんでした。

やってみればわかるということで、「全教室からインターネットを！」実現するため、ネットデイを企画することになりました。

私のメリットとして3つありました。一つは、受け入れ側ではなくボランティア側からこの運動を見てみたかったからでした。二つ目は、電気と電話の工事の資格は持っているのですが、実経験に乏しいので、ちょうど良いフィールドということでした。三つ目に、なんと言っても新たな人との出会いが得られそうだからでした。

私のボランティア論ですが、「自分が出来ることと、自分が得られることを明確にすることが大切だと思っています。自分を犠牲にして行うボランティアはしんどくて、長続きしないと思います。

## ネットデイへの熱き思いの原点

氷上郡に下見に行く途中の高速道路の車中で、小さい時の悪ガキ集団で遊んだ、あの一体感と喜びがありました。何かワクワクするような、でも少し怖いような、また、すぐに友達になって、知っていることを自慢したり、教えてもらったりと懐かしい感覚を楽しんでいました。

実はその下見の時は、アドバイザーとしてケーブリングの会社にボランティアをお願いしていました。その方は本当に気さくな方で、いろいろと教えてもらいました。何せ、こちらも部材や工具等、見るもののほとんどに興味があり、工事の苦労話を聞くのが楽しかったのです。例えば「設計の図面と施工は違うことはよくあるらしい」とか「スチール(導線器具)を入れてみなくてはわからない」と聞いて、いい加減やな~と思ったり、ローゼットが簡単に挟むだけで結線できること等技術の進歩に感心したり、今でしたら当たり前のことが面白かったのです。

以上のような、うきうきとした気分は大切なことですが、ここでネットデイに対して熱き思いの原点をまとめてみたいと思います。

### 【熱き思いの原点 その1】

「自分の引いたケーブルを子どもたちが使う」ところを見ると本当にうれしくなります。思わず子どもに、「これを引いた人知っている?」と聞きたくなります(私が子どもですね)。目を輝かせながら情報をやりとりしている姿を見ると、最高の充実感(へへへ・・・)があります。残念ながら氷上郡では子どもの様子を見てませんので、是非見に行きたいと思っています。

### 【熱き思いの原点 その2】

「人をつなぐのがネットワーク。人から先につながっても良いじゃない!」。ネットデイで、企業・大学・学校・地域の方等いろいろな人が混ざって同じ目的のために協力できるのが、理屈抜きで楽しいのです。ほんとにやみつきになります。いろいろな人が混じるから、面白いことが出来るんだと思います。私は中学校の教師をしておりました。ある意味では均一な集団に属しておりましたので、よけいにそのように感じるのかもしれない。

### 【熱き思いの原点 その3】

「自分の生きる場がある」。私は「こだわりの配線」をします。そうかと思えば、「簡略な工事」にこだわる方もいます。それぞれが自分流ですが、生きる場所が違うので面白いのです。具体的に言いますと、「簡略な工事」は普通教室等の問題なく接続できる場所で生きます。多くの方が簡単な講習でケーブリング可能となります。しかし、学校には音楽教室とか防音のために、簡単に線が引けない場所が何カ所もあります。そこで「こだわりの配線」が生きるのです。建築時の配管は必ずあるので、その配管を最大限生か

しルートを決めていきます。どうしてもダメな場合には壁を抜くこともあります。このように機能美を追求する私の生きる場があり、私の個性が生かされるのがうれしいのです。また、私のこだわりを理解して、こだわりの工事を目指し電気工事の勉強をはじめた方がおられます。本当にうれしいです(だれか、「病気が蔓延している!」と、困った、困ったと言う人もありますが)。

#### いろいろなネットデイ

氷上郡地区のネットデイは実質的です。ボランティアや教育委員会への配慮も、細かな部分にまで行き届いております。保護者はじめ地域の方も自然体で参加されています。ネットワーク講習会も時間をたっぷり取って行われます。一人ひとりがケーブルをつくってテスターで測るのがとても良い取り組みだと思います。

神戸地区で行ったものは、イベント性があって面白く楽しめます。参加された方の意識の変化が直ちに得られます。「インターネットは面白いね!」「子どもが生き生きとしていたね」というように。

いま、私は両方とも良いなと思っております。それぞれの地域性があり、それに応じた取り組みだと思います。

ただ、伊丹市での取り組みで、イベントがその日一日の取り組みになってしまい、継続的な取り組みが出来ていないという問題が起きました。応援しているボランティアとしては、継続して取り組んで欲しいし、継続して出来る課題だと思うのですが、実際学校単独では難しいようです。支援を続ける必要があると思います。

氷上地区の場合は、派手さは無いですが、継続的な利用が図られています。この差はネットデイに至るまでの情報教育に対する取り組みの差が出ていると思います。氷上地区の情報教育研究会を中心とした情報教育の実践が数多く積み重ねられています。

例えば、調べ学習の発表に使うメディアを使って後に自己評価し、再度実践し、メディアの特徴を実体験を通して掴まえさせた上で再度発表さす実践や、ノートパソコンを持ち帰って、子どもが先生役を務め家庭での意識を高める実践等、工夫された多くの実践があります。人を中心に据えた情報教育がなされているのが特徴だと思います。だから人がつながっていくのだと思います。

今、播磨地区と丹波地区で新たな動きが出てきています。また、地域性も違い面白い取り組みがなされると思うと楽しみです。

#### 地域の電気屋さん

氷上地区では地域の電気屋さんが必ずボランティアに参加されてます。私にとっては実践の場を乗っ取るひどい人たちなのですが、参加することはとても大切だと思います。

もともと電気屋さんはケーブルを配線するのが商売です。ただ、コンピュータ・ネットワークのことをあまり知らない。そこで一緒に参加し、ちょっと技術を習得すれば商売になるし、学校も安い金額で依頼できる、これぞ一石二丁です。

ただ、商売となれば、専用のケーブルテスター（フルーク社製）を購入する等の初期投資が必要になりますが、家庭のいわゆる SOHO 構築などで引っ張りだこの電気屋さんになることは間違いないのです。すでに書きましたが配線が難しい教室は必ずあるので、こだわりの支援者がいない場合、そこだけ「LAN 工事はお任せ電気屋さん」に依頼すれば良いと思います。

まだまだ、部材の調達も困難な地域があると思います。電工の販売ルートで部材は入りますので、日本橋まで行かなくても買えます（ちょっと高いですが、1週間程度で入ります）。電気さんが部材のストックを持ってもらうと工事の幅が出来ると思います。

実は氷上で最初の開催校で、部材が間違っただけで発注されていたので、急きょ大阪の業者に車で持ってきてもらったことがありました（これは発注者の点検ミスです。ごめんなさい。このトラブルでスタートが遅れた）。もう一つの原因は、部材に対しての知識が少なかったということだだと思います。今から見ればお笑いですが！

できないことはできるやつに頼めばいい

最期にボランティアをやって行く中で、考えが変わったことがあります。

それは、「自分に出来ないことはたくさんある。それが出来るやつは必ずいる」ということです。それから「それが出来るやつに頼める人間関係さえ持てば良い」ということです。そうすればものごとは出来るのですから！

よく得な性格とか言われますが、ネットワーク社会でコラボレーションを可能にする原点だと思います。一人で出来ることなんてちっぽけです。皆の力を借り、一つに集められれば、すごいこと、すばらしいことが出来ます。

それを体験し、納得するのがネットデイだと思っています。

「あなたは何か出来ますか？」という問い（他人だけでなく、自分からの問いでもある）に答えるため勉強し、実践を積み重ねていきたいです。

（畑井克彦）

## 5 他地域へのひろがり

ネットデイを我が学校でも

以前なら保護者が学校に協力するというと、「運動場の草引き」や「ベルマーク集め」と、相場が決まっていた。どちらかというとな消極的に、自分の時間を単純な労力に置き換えて、学校に奉仕するという姿がそこにはあります。学校側もそんな保護者に対して、腫れ物にさわるように接したり、いかにも迷惑をかけているようにへりくだったり。こんな時代が随分と長い間続き、いつの間にか学校と保護者との間には不可侵の距離感が生まれてきたように感じます。

「ネットデイ」という活動が、初めて日本に持ちこまれてからわずか3年程度。各地での事例がマスコミやホームページで紹介されるにつれて、その活動の意義や効果が、教育関係者だけではなく一般の保護者の中にも、徐々に浸透していくようになりました。

「わたしたちの学校でもネットデイをやってみたい」

こんな声が、情報化教育に前向きな保護者の中から出てくるのも、ごく当たり前のような流れです。これまで「消極的参加」しかなかった学校現場への貢献に、新しく自分たちが積極的に関わることでできる選択肢が加わったわけです。ただひとりの保護者がネットデイに取り組もうとしてもできることではありません。ひとりの教諭が必死に旗を振っても、実現までには幾多の障害があります。教育委員会、学校現場、PTA という3者の深い理解と協力、そして「ネットデイ」への情熱を持った先達たちのサポートがあって、継続的に活用できるネットワーク環境を構築することができます。これをいかに築き上げるかが、ネットデイ成功への大切なポイントです。

つながりのはじまり

氷上郡のN小学校(K町)。ネットデイがなければ、私にはまず一生縁のない学校だったことでしょう。姫路から車で2時間弱もかかる兵庫県中央部のこの学校に、姫路市立の小学校PTA有志7名が訪問したのは、5月末のある日のこと。ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K) による「下見&講習会」に参加するために、ネットデイ開催を目指す、2小学校のPTA 役員のメンバーが集まったのです。

講習会では氷上郡の先生方と一緒に、ネットワーク機器の基礎からレクチャーしてもらい、初めてハブという機械の働きを理解できた女性メンバーがいたり、下見会では、配線工事のプロのPTA 役員が、経路選択から工事手順を詳細に確認したり、その後学校に行くたびに弱電の経路を探すくせのついた若い女性など、それぞれにさまざまな取り組み方をしていました。

「プロを凌ぐ完璧なアマチュアの工事」の技術レベルの高さはもちろん、ネットデイ当日に参加するすべての人々が、いかに汗をかき、満足して帰れるか。そのための準備の大切さを改めて肝に銘じて、自分たちの学校と重ね合わせて、新しい知的刺激に参加者全員が満足しているのが、手に取るようにわかる講習会でした。

ただみんなが「つながり」を実感できたのは、この後オプションで開催された「焼肉懇親会」こと。氷上、播磨、NeS-Kのメンバーが入り混じって、苦労話や導入校の推移、自校の状況などを語り合い交流を深めた結果として、「氷上ネットデイ」には播磨のメンバーが馳せ参じ、播磨でのネットデイには氷上のメンバーが協力するという密約が自然と生まれていました。

この懇親会での交流で、先達たちのサポートの確約を得てネットデイ成功への手応えを実感できたことは、播磨のメンバーにとって言葉に言い表せないほど大きな財産になったに違いありません。

### 播磨での情報化への取り組み

兵庫県南西部に位置する播磨地域では、このように前向きなPTA役員が生まれる素地が、「はりまインターネット研究会」(HIR)の活動を通して育まれてきました。「情報化不毛の地」と呼ばれていた播磨地域の元凶は、その半数以上の人口を有する姫路市の数々の情報化施策の失敗によるものでした。「新しいものに飛びつく」という播磨人気質は良いにしても、城下町として発展してきたどの地方都市にはありがちな、封建的な思考から生まれる地域主観評価（他都市の成功プロセスを学ばずに、自慰的満足感に浸る）に陥ってしまっていたのです。

歩みはまず、「人探し」から始まりました。こんな地域でもきっと一所懸命に情報化について頑張っている先生がいるはずです。おりしも「西播磨テクノポリスマチびらきイベント」という兵庫県の事業と連携して、1997年6月から「はりまこども風土記 - わんぱくちびっこ情報団」という企画を実施しました。デジカメを子供たちに渡して、夏休みに自分たちの視線で校区のいいところを取材、それを先生にホームページにってもらって世界に情報発信しようという企画でした。まったく見えなかった学校現場の状況が、40校47グループ1200人の大イベントを運営する中で、だれもが客観的に把握できるようになってきたのです。それは頑張る先生同士をつなぎ、ボランティアがそれをお手伝いするというふれあいから始まり、絆のネットワークへと育っていきます。ひとつのきっかけが新しい流れを創っていく。いかにも次世代社会へのパラダイムシフトの中に、自分たちが存在していると感じる出来事でした。

### ひろがる「ネットデイ」

そんな前振りがあり、神戸マルチメディアインターネット協議会からの呼びかけを受けて1997年11月「夢プロジェクト - 神戸・伊丹・播磨」を開催することになります。「日本で初めてのネットデイ」と題したこのイベントが、果たしてネットデイと呼べたのかどうかは大変疑問ですが、この日を境に播磨地域で学校の情報化を推進する動きが一気に表面に出てきました。兵庫県のビジョン策定の委員会では「ネットデイへの協力」が提言書に明記され、地域では行政によって学校のインターネット接続が急速に広がりはじめました。徐々に住民も、学校の情報化の重要性をの意識するようになり、ネットデイへの期待

が膨らんでいます。これを後押しするかのよう、幸運にも「スクールズ・オンライン・ジャパン」の支援を受けて、播磨の3つの小学校が512Kbpsの専用線を2年間提供してもらい、それぞれの特性を活かした情報教育の推進を、地域住民の方々と一緒に進めています。各様の事例を創りつつあるこれらの学校を核として、氷上のように「同じ目的を持つ仲間を応援しよう！」という、互いにオープンな連携が広がっていく限り、ネットデイが「つながり」のキーワードとして地域に根ざし、確実に全国に拡大することは、おそらく間違いないことでしょう。

(和崎宏)

## 6 NeS-Kのネットデイ

### 明確な役割の分担

ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K) のネットデイの一番の特徴といえば、「教育に関心があること」を共通の軸として、さまざまな人たちが、さまざまな地域、さまざまな立場から参加していることです。

その名の通り、関西一帯を活動の拠点とする NeS-K ですが、現在までのネットデイの実績は、兵庫県氷上郡内の小学校 3 校で、どれもが大阪から車で高速を經由して 1 時間以上かかる地域で行われたものです。当然、氷上とは縁もゆかりもない NeS-K が急に押しかけて、ネットデイが行われるということはありませんし、それではネットデイが成功するはずもありません。

これからの子どもたちの学びの場として、校内 LAN を整備することが必要である、という学校側としてのネットデイに対する必要感、教育行政と学校における人的・物的な受入態勢の整備、参加する教員や保護者のネットデイに対する理解、ネットデイを成功させるだけでなく、ネットデイ後の活用につながるためにも必要な以上の要件を満たさない限りネットデイに踏み切らないのが、NeS-K のネットデイです。

そして、NeS-K の支援のもと、氷上郡において学校、行政、地域を相手に要件が満たされるよう日常的に汗を流していたのは、氷上郡の教育委員会と現場の教職員たちによるグループ、現在では「ネットワークサポートセンター in ひかみ」(NeS-H) とよばれる主に教職員が中心となったグループです。

NeS-K は主に、氷上郡においてネットデイ実施のためのコーディネーションを行う NeS-H に対し、NeS-K と関わりのある全国のネットデイのボランティアグループとのネットワークを生かして、ネットデイ前に必要不可欠な、ネットデイに対する地域、学校、行政の理解を得るための様々な情報を NeS-H に対して提供しました。

現在までのところ、NeS-K のネットデイは、学校、行政、地域の教職員、PTA、他地域のボランティアが関わりながら、主に NeS-H が氷上郡内における学校、行政、地域の教職員の取りまとめを、実施校が NeS-H から助言を受けながら実施校の受け入れ体制づくりや保護者への理解を図る役割を、NeS-K が NeS-H、実施校と連絡をとりながら、ネットデイ実施計画の作成、現地の下見に基づく工事計画の作成、ネットデイ当日の活動の統括、他地域のボランティアの受け入れの窓口を行っています。

このように、氷上郡における NeS-K のネットデイは、NeS-K と NeS-H が、組織の特徴に応じて役割を分担しつつ、活動の両輪となってネットデイを実施しています。

### 地域に根ざしたきめ細かい支援

NeS-K と NeS-H は、これからの子どもたちの学びのためには、自由にネットワークが使える環境が必要であり、子どもたちの学びの環境をよりよくするための具体的な行動として、学校が活動の主体となる地域・ボランティア参加のネットデイという共通理解のも

と、ネットデイを行ってきました。

NeS-K は、関西という広い地域の中で、教職員、ライター、PTA、技術者、大学関係者など教育に関わる幅広い分野から、教育に関心のある人たちが集まり、豊富なタレント性と教育に対するさまざまな価値観が同居している利点を生かして、学校の情報化を支える運用・利用支援や地域人材を育成することを目的としています。

それに対して、NeS-H のメンバーは、古くからの氷上郡内の教職員による氷上郡情報教育研究会の流れをくみ、氷上郡内の学校や教育関係機関、地域に深く根を下ろし、子どもたちに必要な学びとは？ という教育実践からの視点を大事にしながら、あたらしい実践の試みやそれに伴う学びの場の整備などを行ってきました。

関西という緩やかな地域としての共通性と、「子どもたちのために、教室にもネットワークを」という共通の思いに支えられ、NeS-K と NeS-H のジョイントプロジェクトとして、氷上郡における NeS-K のネットデイは運営されているといえるでしょう。

しかし、NeS-K 発足の当初から、NeS-K と NeS-H が存在していたわけではありません。NeS-H とは、氷上郡から NeS-K に参加し、氷上郡内でのネットデイ実施のために、実施校、行政、地域、PTA、地域の教職員など様々なレベルでのコーディネートをはかってきた氷上郡情報教育研究会の有志が、ネットデイで育まれた地域の人たちのつながりをもとに、NeS-K と連携を保ちながら組織としての自立を図り、ネットデイでの経験をいかして、より氷上に根ざしたきめの細かい情報教育の支援を行うために組織したグループです。

当初、NeS-K はその名にもあるように、「かんさい」という広い地域を対象にしていますが、氷上郡内でのネットデイを通して、NeS-K の知識や経験が氷上郡内に移転し、経験の蓄積や地域人材の育成、ネットデイに関わった人と人とのネットワークが目に見える形であらわれたことから、NeS-H は、より地域にフォーカスし、今後の氷上郡内でのネットデイを含めた情報教育支援を NeS-H を中心とした地域の人たちが行き、それを NeS-K が側面サポートするという、活動の地域への分散と相互の連携の体制が NeS-K という緩やかな組織の中で整ったということです。

相互に学び合いながら

以上のように、NeS-K はメンバー構成が多様で、関西という地域内で学校の情報化や情報教育の実践に携わっていたグループや個人の緩やかな連合体ともいえます。メンバーは、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫と各地に分散しており、それぞれの地域において、氷上のようにグループや個人で、情報教育の実践や支援を行っていたり、地域の活性化と広く開かれた学校を求めて活動を行っていたりします。

ネットデイなどの NeS-K の活動は、学校の教育の情報化の支援だけでなく、様々なグループ間が相互に交わり、情報交換を行いながら、学校の情報化に対するグループとして考えや自分たちの活動について語ることで、今までのグループとしての活動を振りかえったり、これからの活動に対する新たな視点を得る場としても機能しています。

学校に対する立場も異なれば、関わり方も異なる人たちの学校の情報化に対する思いを

ネットデイを中心とした NeS-K の活動の中で互いに照らし合わせて、それぞれのグループや個人の活動を振りかえり、固定しがちな自分たちの教育に対する見方やこれからの教育の姿について、相互に学び会う機会が多く設けられているからこそ、このような緩やかな連合体が現在まで維持されているのだと考えます。

現在、NeS-K の主な活動は、「ネットデイ」なのですが、メンバー各自の最終的な目標としては、「子どもたちの学びをよりよくしていく」ということに尽きると考えます。しかし、それぞれ、学校に対する立場も違えば、関わり方も異なる、地域によっても事情が異なるというなかで、現在、学校の情報化の支援として NeS-K という緩やかな連合体が行える活動は「ネットデイ」以外に具体的な活動としてなかなか見えてこないのが現状です。

学校の情報化の支援として、何らかのつぎの活動を模索すべきか、また、ネットデイを通して得られる様々な効果について検討を行い、更なる NeS-K としてのネットデイの発展的なモデルを提示すべきか、まだ検討段階であるといえます。

#### 子どもたちの学びを支える

NeS-K のネットデイの発展的なモデルを提示するためにも、ネットデイがネットデイだけに終わらせないように、すなわち、ネットデイの成果を参加したボランティアや地域の人たち、保護者に対していかに返していくべきか、今後の NeS-K のネットデイの課題だといえます。

ネットデイは子どもたちの学びの場としてのネットワークを教室にも広げることですから、ネットデイ後は、当初のネットデイの目的である、子どもたちの学びの場がネットワークを通して広がるような学習活動が展開されるべきですし、そもそも、そのためのネットデイであったわけです。

NeS-K のネットデイは、ネットデイを行った学校の教職員と NeS-K の参加者だけではなく、広く地域の人たちや PTA、他地域のボランティア、学校関係者に支えられて行われます。参加した人たちに対して、ネットデイの成果、すなわち、ネットデイ後の子どもたちの成長した姿が見えてくるような実践を何らかのかたちで時間をかけて返していかないことには、NeS-K のネットデイとして活動の継続や活動に対する理解は得られないでしょうし、ネットデイに対する評価もできません。

氷上郡で行った NeS-K のネットデイでは、実施校が、ネットデイ後のネットワークの活用に対するビジョンと、学校として期待する子どもたちの学びの姿を保護者に提示し、それに対する理解を保護者から得たことで、保護者の積極的な参加がありました。

ネットデイ後、ネットデイに参加した保護者が学校に対して、ネットワークを活用した学習の状況について訪ねたり、親子揃っての活用につながるよう働きかけたりする例が見られました。ネットデイに対して理解を示し参加した保護者とすれば、当然の行動でしょう。ネットデイへの保護者の参加が、保護者の側から学校に対してネットデイ後の状況について学校からの声を積極的に求めるきっかけとなり、なにより、ネットデイが、今後

も継続的に保護者と学校がこれからの子どもたちの学びについて語り合うきっかけとなったと考えられます。

また、NeS-H を中心として、地域の教職員が、ネットデイ後のあらたな実践を模索する中で、ネットワークを生かした実践の検討を行い、この先必要となる子どもたちの学びの環境について議論し、ともに学びあうネットワークも育ちつつあります。

NeS-K としては、ネットデイによって空間的に子どもたちの学びの場が広がるという変化だけでなく、ネットデイで再構築された人と人とのネットワークが、今後どのように、ネットデイ後の子どもたちの学びに貢献するのか、ネットデイをネットデイで終わらせるのではなく、子どもたちの学びを支える手段としてのネットデイという冷静な視点で、自分たちの活動を長期的に見届ける必要があるように思います。

(杉本圭優)

## 7 ネットデイサミットに寄せて

どうも悪乗りではじめたネットデイサミット！ あれよあれよと膨らんで、今やすごい状態になってしまいました。元をたせば、「ネットデイマニュアルを出すからには、その発表もかねた研究会をしよう」なんて言いだしたのがきっかけでしょうか？(少なくとも、こんなところではなかったかな？)

ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K) の立ち上げは、「どうも学校のネットワークがうまく機能しない、お金をかけて引いたネットワークが使い物にならない、変な方向で作られている、勘違いをした情報教育のためシステムが不適切」なんて話が仕事柄、耳に入ってくるようになったからです。みんなが集まるとそんな話ばかりが酒の肴になり、深酒をするので困ったものでした。

アメリカには「ネットデイなるものがある」。そんな話を耳にして、やって見ようと思いつつ、何をどうしていいのやらわかわからないままに初めたネットデイ。これが本家とはかなりかけ離れたやり方で始まったように思います。

行政の対応、ニーズにいつも悩まされることの多さに驚き、地域によって違い、人によって違い、学校の先生や親たちで違い、本当にすべて違うのですから大変です。

コーディネートの仕方なんか判るわけでもなく、ただひたすらお願いする日々。「これでどうですか？」「これはダメですか？」そんなことばかりが続いていたような気がします。

そして、はじめた頃のネットデイは、「段取りが悪い」「人が使えない」。大変迷惑をかけたネットデイだったような気がします(ちなみにいまだにそうですが)。

「子供たちのため」「教室でコンピュータを使い勉強する姿」そんな姿が見たいためだったのかもしれないし、自分達が楽しかったからかもしれないし、わからないがやり始めたネットデイどうにか形になってきました。

「もうひとがんばり！！」

そんなことを自分に声をかけながらこのネットデイサミットを迎えることになりました。

参加された皆さんが、

「子供達の為に」

「俺達でもできるぞ」

「私の学校に」

そう思っただけなら本当にうれしい限りです。このサミットがお祭りで終わらず、どこかの小さな学校や子供のためにLANを教室まで引くぞ！そんな情熱を持った先生や地域人々、また子供にネットワークの楽しさを教えてやりたい大人たち、そんな人たちの為に少しでも役に立つことができればいいと思います。

私達は、行政の都合や安い工事業者としてネットデイをするのではなく、ネットワークを通して人と人のネットワークを作っていくことに力を注ぎたいと思います。

(棟梁・中島唯介)

ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K)

[参考]

学研『NEW 教育とコンピュータ』(1999年6月号)

学校情報化推進人物伝「学校をつなく人をむすぶ」

兵庫県氷上郡教育委員会指導主事

岸田隆博さん(42)

#### 共同設置の教育委員会

瀬戸内海と日本海に面した兵庫県のほぼ中央部、隣の京都府との境に位置する兵庫県氷上郡は北から青垣、市島、春日、氷上、柏原、山南の6つの町で構成されている。

南の瀬戸内海に注ぐ加古川水系の流れに沿った盆地に各町が点在し、気候も風土もそれぞれ違う。唯一の鉄道であるJR福知山線は5町に7駅。中心部の柏原駅から大阪駅までは1時間に1本の特急で約1時間半の距離だが、最も北の青垣町はその昔、地域をあげて鉄道敷設に反対したため今も町内に駅はない。広域で、面積の大半を中国山地の山並みと農地が占めている土地柄である。

氷上郡の6町は共同で教育委員会を設置している。全国でも8例しかない共同設置の教育委員会だ。

岸田隆博さんはその氷上郡教育委員会の指導主事として、氷上郡全域の学校情報化に取り組んでいる。

複数の町が共同で設置する教育委員会と普通の教育委員会が違うのは、整備計画を予算化するのには各町であり、予算の承認を得なければならない議会もまた町の数だけ存在していることである。

このことは岸田さんにとって大きな壁だった。

氷上郡6町の小中学校32校の全校を広域教育ネットワークで結んでインターネットに接続するという構想を岸田さんが最初に考えたのは平成7年。しかし平成8年度の予算要求は通らなかった。計画に反対する町があり、それを崩せなかったのである。

それから1年かけて各町を説得し、ようやく次の平成9年度の予算要求で6町の足並みがそろい、整備予算が認められたという経緯がある。

「1町でも賛同してもらえないと、整備はできないんです。だから総務課長会や助役会が開かれるときはかならず会議の中で説明の時間を取ってもらいましたし、行くところ行くところで説明して歩きました。議会が始まると郡教委で待機して、何かあったら資料を作って町にファクスで送る。それが6つありますから、またどこかが落ちるんじゃないかと気が気でなかった」

気苦労は相当なものだった。

どこの学校も同じ職場にしたい

先生の負担をふやさない

柏原町にある郡教委の建物にインターネットサーバ類を設置し、各学校からはISDNの電話回線での

センターにダイヤルアップ接続する形である。いろいろ迷ったが、学校にサーバは置かないことにした。

「整備計画をまとめるとき、ぼくは3つのことしか考えなかったんです。同じ郡の中で広域に散らばっている6町の子どもたちに、お互いにコミュニケーションを図ってもらいたい。6町のどこの学校も同じ環境にしたい。そして、学校の先生の負担を増やさない。この3つです。とくに先生は、このネットワークを利用しながら、子どもたちを教育育てるという本来の仕事に専念してほしい」

センターを経由する教育ネットワークの構成では、運用管理の負担をセンターに集中することができる。教育にふさわしくない情報にフィルターをかけて排除することも容易で、もちろん整備計画にはそういう趣旨はすべてうたった。

「ややこしい面倒は、こちらがみればいい。授業を持っていないわけだから、何とかなるだろう。当時は、それしか考えていませんでした」

と岸田さんは笑う。何としても執念がこもっていた。

こうして平成9年度から氷上郡教育委員会ネットワークの整備が始まり、これまでに小学校の全校と中学校の一部、そして各町の公民館をつないだ。今年度には中学校の残りを接続する。

行政に根強い横並び体質は、1つの町だけ突出することも、また立ち後れることも嫌う。しかし1つの市で同じ数の学校を一度にインターネットに接続するのは予算的にとても無理だが、氷上郡では6町が分担して予算化するため、一斉に整備することができた。OKが出る仕事が早いという共同設置であるがゆえのメリットは当然ながら岸田さんの頭にあった。

つないだあとも、いくつか仕掛けを凝らした。たとえば、全小学校でホームページの公開をテーマに掲げ、ホームページを作るために開いた研修講座はその一つだ。

「コンテンツは学校全体で考えてください」と指示しただけで、あとは手を貸さずに放っておいた。

自分から進んで研修に参加したわけではない教員もいて、研修の時間を無駄につぶしていたが、そのうち自分から学校にコンテンツを提案するようになった。そうやって25小学校すべてで、ホームページの公開にこぎつけることができた。

「こちらが手伝っていたら、こうはいかなかったでしょう。ホームページの公開は整備予算をつけてくれた町行政に、こんなに活用されてますよと報告できますし、うれしかったです」

センターとインターネットを結ぶバックボーン回線が、整備の途中から急遽、一気に増強された。64Kbpsの狭い入り口しかないネットワークに32校をつなぐなど、そもそも無理だったのだが、「つないだら勝ちなんですよ。一度つながったものを、誰も

ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K) 止めようなんて思わない。議員さんが視察に来て『なんで、こんなに遅いんや』というので、64Kbpsの回線しかない事情を説明したら、『それやったら増やしたらどうや』。それで1.5Mbpsに増やしてもらうことができたんです」

してやったり、という顔になる。

#### 情報教育との出会い

岸田さんは氷上郡の氷上町で生まれ育った。高校も地元の柏原高校(柏原町)に進み、大学は東北の福島大学教育学部だったが、卒業すると、教師として氷上郡に戻ってきた。

ことさら教師になりたいわけではなかった、という。「素晴らしい先生に出会ったことはないし、今でいう問題児だったんです。授業を平気で抜け出して山に登って昼寝したり、学級会の議題はぼくのことばかりでしたよ。先生からもしょっちゅうどつかれた。でも、不思議に学校へ行くのは好きでしたね」

新任の小学校では3年間で4年、2年、5年のクラス担任を受け持った。

新任の岸田さんは毎日、放課後、自分のクラスに戻って、その日、誰と話をしたかをチェックした。一度も言葉を交わしたおぼえのない子どもがかならず何人かいた。翌日は、まずその子に声をかけるよう心がけた。

「熱血教師の思い込みでやってたんですが、学校教育というのは子どもを伸ばしているつもりで、ひょっとして、つぶしているのではないかという気持ちがどこかにありました。わからない子どもにも一律に同じドリルをさせ、遅れると放課後も残らせて教える。わからないから残る、残るから遊べない、遊べないから勉強したくならない。これは悪循環ではないかという疑問がずっとあったんです」

新任期間を終えて次の小学校に異動すると、たまたまパソコンの導入が始まった。今から考えると、旧式のDOSしか動かないパソコン、それもたった1台だったが、新任時代に趣味でパソコンを勉強していたこともあり、

「これを使って、1人1人の子どもに応じた教育はできないだろうか」

そう考えたことが、情報教育との出会いとなったのである。

理解の遅い子どものための学習ソフトや学びを評価するソフトを作った。子どもたちのつまづきを早期発見・早期治療するためである。パソコンに評価をさせたおかげで、つまづいた子どもにかかわる時間が増えた。

「その時間の中で起きたつまづきはその時間の中で取って、放課後はみんなで遊ばせてやりたい。それでパソコンを使い始めたんです」

そのころ同じ町内の小中学校で情報教育に関心を

持つ先生に呼びかけ、山南町情報工学研究会を結成した。氷上郡で最初の研究会である。

勤務終了後の時間を利用して、定期的に研究会を開いた。ちょうど阪神間の都市では、市の予算で相次いで教育センターが設立され、新聞などで大きく取り上げられていた。

「よそでは教育センターというハコ物がどんどん建っているのに、こちらは学校を持ちまわり会場にして、パソコンを車に乗せて移動式の研究会です。『お金のあるところがいい教育ができるのか』『いや、そんなこと、あるはずはない』なんて真剣に議論したものです。われわれも若かったんですね」

この研究会、盛期には100人のメンバーを数えた。その活動に応えるように、町は他町にさきがけて全校にパソコンを導入してくれた。結果、山南町の学校に行くと、パソコンをやらなければならないというので、希望する先生が一時、激減したというエピソードが残っている。

小学校の教員を11年間つとめたあと、降って湧いたように、教育委員会への異動が待っていた。教育に対する違うかかわり方があることを身にしみて感じたという。

「教育委員会では授業はないから、直接教えることはできない。だから、子どもを中心に据えて、子どもの可能性を發揮できる環境を作る、子どもの可能性を引き出してくれる先生を作る。それが新しい仕事だと」

岸田さんのそばには、いつも子どもがいる。ひょっとして、かつての自分の姿を見ているのかもかもしれないが、

「そうかなあ」

と岸田さんは笑うばかりである。

#### ネットデイ

ネットデイという活動がある。

まだ日本ではなじみは少ないが、ボランティアが学校のインターネット利用環境の構築を支援する活動だ。氷上郡ではこれまで3小学校でネットデイが開かれ、校内のどの教室からでもインターネットが利用できるよう配線工事がおこなわれた。

氷上郡で初めてネットデイが開かれることが決まったとき、じつは岸田さんは悩んだ。整備計画がスタートした平成9年度末のことである。最初の一步はなかなか踏み出せなかった。

整備計画によって、パソコン教室のパソコンはインターネットに接続されている。しかし活用が進んでくると、普通教室からも利用したいという希望が出され、その配線工事を京阪神のボランティアが協力して実施することになったのである。

同じ工事を業者に頼むと何100万もの出費が必要だが、ボランティアが手伝ってくれるおかげで、町が支払う費用はごくわずかな部材費だけですむ。それで

ネットワークサポートセンターin かんさい (NeS-K) 学校のインターネット利用環境が格段に向上するのはありがたいが、まわりの人に相談すると、「ネットデイは下手をすると失敗するぞ。失敗したときの後始末は自分でできるのか」

そんなものは論外といわんばかりの答えが返ってきた。

それでも岸田さんがネットデイの開催に異論をさしはさまなかったのは、何かしら新しい可能性を感じたことが理由だった。

校内 LAN 配線の拡張は整備計画の中に盛り込んでおり、平成 12 年度に実施予定だが、それを待てないほど活用が進んでいる。おまけにボランティアだけで作業を進めるのではなく、教職員や PTA も作業に加わってくれる。

田植えと同じなのだ。昔は村中が集まって、総出で水を張った田に苗を植えた。岸田さんも子どものころ、大人たちにまじって田植えを手伝ったことがある。

「ボランティアも一緒なんですね。今はそういう共同体的なものがなくなり、子どももタテ社会で徒党を組まなくなりました。それは大人が捨てたから、子どもも捨てるんです。けっして子どもが悪いんじゃない」

そう考えると、ネットデイの趣旨がよく理解できた。

当日は岸田さんも見よう見まねで作業に加わった。廊下の天井パネルが次つぎに取りはずされ、LAN ケーブルが天井裏に配線されていく。腰の重そうに見えた先生たちも率先して脚立に上り、自分たちの手で作業を進めた。このときは作業に手間取り、夜 8 時すぎまでかかったが、配線が終わってみると、充実した表情が並んでいた。

なおさらうれしかったのは、普通教室からインターネットが利用できるようになったその小学校の授業の様子の変化だった。

子どもたちはノートパソコンを黒板の横の情報コンセントにつないで必要な情報をとってくると、あとはノートに書き物をしている。インターネットは特別のものではなくなっていた。

「これはいい。ぜひ、うちの学校でもやりたい」

と、名乗りを上げる先生も現れた。その小学校で開かれた 2 校目のネットデイでは PTA が実行委員長を引き受け、盛り上げてくれた。

「氷上郡教育委員会ネットワークという 2 年かけて作ってきた環境を、もっと利用したいという学校が増えている証しです。それは教育委員会としてもうれしいから、サポートしたい。PTA の人たちも夏休みの学校奉仕作業と違って、みんな何とかしてあげたいという気持ちで集まっている。そういう地域コミュニティの力が、学校には必要なんです」

子どもたちにとって居場所のある学校だけでなく、子どもたちの居場所のある地域づくりまで、岸田さんは見据えている。

ネットデイを実施するための岸田さんの役割は裏

方のコーディネータである。6 町の共同設置という特殊事情もあって、教育委員会が GO サインを出したところで、学校の設置者である各町の下承が得られないと、せっかくのネットデイも開けない。

このときも、行くところ行くところで説明を続けた。

なかなか理解を示さなかった町が一転して OK を出したときには、こんな意外なやりとりがあった。

「教室に線だけ引いて、それで役に立つんか？」

「いや、パソコンがいります」

「なんで、それをいわへん。必要なパソコンは町が整備してやる」

これにはビックリしたと岸田さんはいう。半分あきらめて、遠慮していたのである。

「人から何といわれようと、今のぼくの役割はコーディネータです。環境整備、人材育成をはじめ、子どものためになることであれば、何でもコーディネータです。日が当たるのは学校の先生でいいんです。自信をもって、子どもを教えていってほしい。そして先生が輝いている間に、次の方向づけを打っておく。急いでもダメです。何年もかかるつもりでやらないと」

コーディネータはきれいだとはすまない。駆け引きも必要で、ときには強面を見せ、大声をあげなければならぬこともある。

そんな押しの強さに拍車をかけるのは、どうやら、若いときからいつも 10 歳は老けて見られたという風貌らしい。こう見えて、怒るとまるで仁王サンになるのだ。

とはいうものの、仕事が忙しく、上 2 人の子どもの出産には立ち会えなかったが、3 人目のときは何とか時間ができた。病院の廊下で待っていると、看護婦が声をかけてきた。

「あ、お父さん、いらっしゃってたんですね。ご主人は？」

カチンと頭に来て自宅に帰ったとたん、3 人目が生まれ、結局、出産に立ち会えなかった。

「でも、子どもは、ぼくが若づくりをせんと、おじいちゃんが来たといわれるから、嫌がるんです。それが一番かなわん」

口調とは裏腹に目が細くなる。

(注) 岸田さんは 4 月から兵庫県立人と自然の博物館 (三田市) の指導主事に異動した。

(文と写真 釘田寿一)